

神戸大学 大学教育推進機構 大学教育研究

第 16 号 (2007 年度) 2007 年 9 月 30 日発行 : 17 - 32

ラーニング・コミュニティを活用した教育の改善について

高野 篤子

ラーニング・コミュニティを活用した教育の改善について

高野篤子（横浜市立大学）

はじめに

アメリカ合衆国の一部の大学の潤沢な基本金や莫大な寄付といった事例に我々は目を奪われがちだが、ほとんどの大学は学生が在籍していることよって得られる収入，すなわち授業料やその他の関連する収入や補助金，学生に対する奨学金といった収入によって運営されている。地道に学生を確保し，授業料収入を得ることが，大学経営の安定には欠かせない。浮沈の激しいアメリカの高等教育界で生き残るために，個々の大学は学生の人口動態や政府の方針の変化等に敏感に応える。アメリカ合衆国のコンサルティング会社であるノエル・リビッツ社の報告によると，2012 年までに高等教育へアクセスする学生数がさらに多くなり，ハイスクール卒業生の 75%近くまでが進学すると推定されている¹。しかし，大学の卒業率は約 59%で，初年次での中退率は約 21%と見積もられている²。各大学は学生の受け入れ・維持とともに，さらに教育目標を明確にし，その具体的な成果を証明するアカウンタビリティ（説明責任）も求められている。

本稿では，アメリカ合衆国において活用されるラーニング・コミュニティに着目し，大学での教育・経験の質そのものを向上させ，学生のリテンション（在籍継続）率を高め，さらにカリキュラム編成および学生の履修登録管理までも計画的かつ効率的にする取り組みを考察する

1. アウトカムにつながるラーニング・コミュニティ

アメリカ合衆国ではここ 20 年来，政府やア Krediteーション団体から大学に対するアカウンタビリティ（説明責任）を求める圧力が増し，教育の質と効果については，もっぱらインプットとプロセスにあった関心が，アウトプットとアウトカムに重点がうつってきた³。これまで，教育の質は，入ってくる学生の学力，教員の質や評判，蔵書の数や学生が利用できる他の学習資源といったインプット，そして提供されているプログラム，カリキュラムの必修条件，学生支援サービスの利用可能性といったプロセスによって評価されていた⁴。だが，1990 年代に入ると大学は学生へ与える付加価値が問われるようになった。すなわち，これまでの評価尺度であった大学の知名度や伝統といった評判，教員数といった資源，卒業生の就職率，大学が提供する専門や専攻の数といった要素だけではなく，学生が大学で獲得した知識やスキルといった教育の成果を測ろうとするようになったのである。

付加価値を評価する上で注目されてきたのがアレクサンダー・アスティンのI-E-Oモデルである⁵。学習開始の時点（例えば大学の入り口）におけるインプット、すなわち学生がはじめに持っている知識やスキルや態度等が、一定期間の学習（大学での教育・経験）により、カリキュラム修了（出口である卒業などアウトプット）時点でどうなるのか成果（アウトカム）を測るというものである。「インプット」、「環境」、「アウトプット」の3時点のデータがそなわってはいじめて大学が意図した教育的経験（教育プログラム）の効果を確認することができる。例えば、少人数の「教養ゼミ」に新入生が履修登録したか否かを環境変数とし、学生のレポート作成能力や成績をアウトプット変数として比較をしても、インプットのデータが欠ければ、その「教養ゼミ」が成果を上げたか否かは十分に説明できない。入学時点で学生が持っていた能力を把握できていないから、実施した教育プログラムの効果を確定できないのである。アスティンのI-E-Oモデルは必ず「インプット」、「環境」、「アウトプット」の3時点のデータを用い、アウトプットを測るものさしは、評価されるべきと考えられる大学での教育・経験の目的・目標に照準を合わせて設定されなければならない。到達目標は、各大学で独自に設定するものであるが、学士課程においてはコミュニケーション能力や自己管理能力といったジェネリック・スキルgeneric skillとよばれる汎用的な能力の獲得を目標に据え、達成基準を設定し評価する傾向が強まりつつある。個々の大学は、大学教育で何を教えるかより、どういう能力をどのようにして学生に身につけさせるか、つまり学生が何をどれだけできるようになったのか、という教育の成果に重点を置くようになった。アウトカム・アセスメントの導入・実施によって教育の質を確保しようとするようになったのである。

学習の成果（アウトカム）の指標（インディケーター）として、CIRP(Cooperative Institutional Research Program)、NSSE (National Survey of Student Engagement)、CAAP(Collegiate Assessment of Academic Proficiency)、CSEQ(College Student Expectations Questionnaire)など全国的な調査がある。各大学は実際にアウトカム・アセスメントを行うにあたり、これらの全国的な調査を利用する他に、大学独自で試験、ポートフォリオ、キャップストーン、論文、インタビューなどを用いる⁶。そして、教育におけるアウトカムを高める要因として明らかになっているのは、学生同士の相互作用、学生と教員の相互作用、人種や倫理的な課題の討論、多様性の確保、チュータリングである⁷。特に、こうした要因を含むカリキュラム編成および教育方法としてラーニング・コミュニティが有効な手段として耳目をひいている。ラーニング・コミュニティは学生の学業達成およびリテンション（在籍継続）率の向上、さらにオープン・アクセスと学術的水準の維持の両立を可能にすると期待されている⁸。

ラーニング・コミュニティとは、学生がグループで学習する、あるカリキュラム・テーマを取り巻く科目群で、学生は互いのつながりや教員とのつながりを保ち、学習効果を高めることができるという方法である⁹。ラーニング・コミュニティ内の学生は課題に関して教員から個別の指導をいっそう得られ、授業外でも自ら積極的に学ぶという¹⁰。また、他科目の内容とのつながりを見出すことがより容易になるようである¹¹。学生は自分のラーニング・コミュニティの他の学生と友人になる傾向がみられ、学びのグループを形成しやすくなる¹²。つまり、ラーニング・コミュニティは、学生と教員および学生同士の相互交流を促進する。これらの総合的な組み合わせの成果として、学びが向上し、大学での体験に対する満足度が上がり、リテンション（在籍継続）率が高まる。ラーニング・コミュニティ内の学生は、ラーニング・コミュニティに所属しない学生より高い点数を取って、長く大学に留まり、さらにラーニング・コミュニティ内の学生は、ラーニング・コミュニティ外の学生より、大学につながっていると感じているという¹³。

ラーニング・コミュニティの評価は、リテンション（在籍継続）率、成績、GPA (grade point averages)といった定量的尺度や、満足度といった認知に関する学生調査により立証しようとするものが多い¹⁴。近年はEポートフォリオを用いる大学も多い。ラーニング・ポートフォリオは、学生が学習の達成を示すものを累積することにより、学生の成長を質的に評価する試みである¹⁵。学生が授業の最初に書いた作文と最終に書いた作文をディベロプメンタル・ポートフォリオ (developmental portfolio) と呼んだり、対話式のレジюмеやインターンシップ先の指導者からの手紙などを集めてショーケース・ポートフォリオ (showcase portfolios) としたりする州立のリベラル・アーツカレッジもある¹⁶。また、教員の実践記録としてのティーチング・ポートフォリオ以外に、大学の組織全体の評価としてのポートフォリオを活用している大学もある。特に、次章でも取り上げるポートランド州立大学ではセルフ・スタディを大学のポートフォリオ (institutional portfolio) として、アクレディテーション時における判断材料ともなるようにホームページ上で公開している。

アメリカのアクレディテーション団体はアウトカムの評価を各大学に条件付けても目標そのものの是非を問うてはいない。教育目標は各大学が設定するものであり、その成果を測り説明する責任は大学にある。学習の成果とリテンション率の向上に役立つのがラーニング・コミュニティであり、しかも学生の履修登録の管理やカリキュラム編成の見直し等にむすびつく。

3. ラーニング・コミュニティを活用したカリキュラム例

この章では、U.S. News & World Report 社の 2008 年度 America's Best Colleges のラーニング・コミュニティの部門において上位にランキングされ、高等教育の関係者からもその教育プログラムの成功が認められているワシントン大学、エバークリーン・ステイト・カレッジ、ポートランド州立大学を取り上げる。これら 3 つの州立大学は、ハイスクールにおける成績が上位層、中下位層、中上位層と入学してくる学生の学力、すなわち大学のポジショニングおよび学生集団の性質がいずれも異なるが、ラーニング・コミュニティを積極的に活用している。州からの財源の縮小、多様化する学生の増加、求められる教育の成果の立証という課題をラーニング・コミュニティによって、いかに克服し、どのように教員を関与させ、学生を大学に適応させ、学習を維持・継続させているのかを検討する。

(1) ワシントン大学 University of Washington

ワシントン大学は 3 つのキャンパスを持つ伝統のある大規模大学である¹⁷。州立の研究大学すなわち州の旗艦大学だが、ここ 15 から 20 年の間に大学を学習する機関であるラーニング・カレッジにするために、所属している学問分野の枠を超えて、学生に対する教育責任を果たそうという合意ができた。特に新しい学長が学士課程の教育に力を入れている。学士課程の学習および教育を支援する学士課程教育 (Undergraduate Education) のオフィスには 7 人のプロフェッショナルが配属されている。

ワシントン大学のラーニング・コミュニティには、成績優秀者を対象とした特別教育プログラム (Honors programs)¹⁸、環境プログラム¹⁹などいくつかのプログラムがあるが、中でもユニークなラーニング・コミュニティは FIGs (Freshman Interest Groups) プログラムである。新入生の約 70 % にあたる約 3200 から 3500 人が秋のクォーターに履修登録する。このプログラムは、〔例 1〕のように一般教育の 3~4 科目を 12~17 単位のパッケージとして、全部で 165 の FIGs (165 クラスター) が設定されている。学生はそこから自分の興味・関心のある 1 FIG (1 クラスター) を選ぶ²⁰。同じ FIG に所属する学生たちは共通するテーマに取り組み同じ科目を取るという履修方式であり、各 FIG の中に、新入生向けの「GEN ST (General Studies)199 ユニバーシティ・コミュニティ」という科目が必ず含まれる。

〔例1〕

1 FIG (1 クラスター)

科目名	単位	受講生
Introduction to Public Speaking	5 単位	FIG 参加学生と一般学生
Introduction to Comparative Politics	5 単位	FIG 参加学生と一般学生
The University Community	2 単位	FIG 参加学生

1 FIG (1 クラスター)

科目名	単位	受講生
Survey of Western Art-Ancient	5 単位	FIG 参加学生と一般学生
Introduction to Psychology	5 単位	FIG 参加学生と一般学生
The University Community	2 単位	FIG 参加学生

1 FIG (1 クラスター) が約 165 ある。

○, FIGs プログラムに参加する同一の学生集団 (20 ~ 25 人) から成るラーニングコミュニティで, FIG リーダーとともに必ず週 1 回以上は顔を合わせ学習することになる。

「ユニバーシティ・コミュニティ」は、週 1 回 50 分間の 2 単位の科目で、20 ~ 25 人の学生の小集団で構成される。学生は、学部の上級生や大学院生である FIGs リーダーのもとで、学習の計画についてなどさまざまなディスカッションを行ったり、オンライン・ポートフォリオを作成したりする²¹。FIGs は一般教育科目であるため、「ユニバーシティ・コミュニティ」以外の科目が 500 人ほどの大規模な講義科目となることもある。しかし、FIGs に参加した同じテーマや興味をもつ 20 ~ 25 人の学生たちは同じ FIG の中の他科目のクラスで一緒になることにより、自動的に学習グループをつくることことができる。また、FIGs は、教室内だけではなく教室外での経験を重視し、研修旅行や、社会的活動や共通のテキストの読解を通じて地域のことを知るなどの調査・研究を行なっている。

このようにして、1987 年から開始された FIGs (Freshman Interest Groups) プログラムは新入生の履修登録、および意味のあるコネクションづくり、大学への適応を助けてきた²²。しかも、FIGs (Freshman Interest Groups) は複数科目を 1 つのクラスターにしかただけのもので、各科目の教員の負担が従来に比べて増えたり、また担当教員間でシラバスを調整したりすることはない。むしろ、一般教育にあたる各科目を提供してい

る従来のデパートメントにとっては、FIGsで関心をもった学生が自分たちの専攻を選ぶ、すなわち自分たちのデパートメントの学生が増えるというメリットがある。さらに、教員向けに、成績評価、TAの活用の仕方、大規模クラスの授業についてのワークショップの実施といった支援プログラムが用意されている²³。

ワシントン大学は研究大学なので、成績優秀者を対象とした特別教育プログラム（Honors programs）と環境プログラムには、学事部門 academic affairs に来る州の予算が配分されるが、FIGs には割り当てられていない。FIGs は独立採算制をとっており、2003 年にはどの学生からも新入生登録費 250 ドルを徴収するようになり、その収入で運営されている。FIGs リーダーを務めるボランティア学生は、学内で募集され、10 週間のリーダー養成コースを受ける。応募者の GPA は重要だが、ピアリーダーとしての情熱と履修の履歴など学生自身の経験を考慮して選出されている。FIGs リーダーにとって、FIGs リーダーの経験そのものと、全体でもらえる 6 単位がインセンティブになっている。FIGs プログラムの評価は、学生の意見とピアリーダーの意見、担当教員からの意見を聞いて行なう。教室の規模が大規模だと学生の評価にばらつきがあるが、25 人くらいの小規模な集団なため学生の評価は大体同じようである。

ワシントン大学のFIGsプログラムは、提供される一般教育科目間相互の調整・統合がほとんどないにもかかわらず、非常に低コストで成果をあげているとされている²⁴。それは、州から予算配分されない代わりに各学生から費用を徴収し、ボランティア学生のピア・リーダーや、研究志向の教員ではなくプロフェッショナル・スタッフの活用等によるラーニング・コミュニティを形成し、プログラムの定員管理を行っているからであろう。

（2）エバークリーン・ステイト・カレッジ（The Evergreen State College）

エバークリーン・ステイト・カレッジは、地方に位置する比較的歴史の浅いリベラルアーツカレッジである²⁵。ガスキンGuskinらによれば、全学における教員の役割と教育の負担の見直しにより、他の州立大学と同様の予算で高い教育の成果をあげている、と評価されている²⁶。この大学は、州立で、リベラルアーツカレッジとはいえ、寮に住む学生は 25%で、75%が自宅通学生である。在籍者数は約 4200 人、50%が転入学生と成人学生である。フルタイムの教員数は約 160 人、全ての科目においてクラスの規模は 100 人以下である²⁷。

エバークリーン・ステイト・カレッジの使命は、「革新的な、芸術、人文科学、社会科学、自然科学の学際的な教育プログラムを通して、学生の潜在能力を実現するのを助ける」ことである²⁸。加えて、「コミュニケーションする、問題解決する、現実の問題に向けて

協力的かつ自主的に働くという基本スキルをともなった卒業生を輩出」することを目指している²⁹。卒業生に対する期待としては、「多様な社会に参加し、協力すること。責務を引き受けること。創造的に効果的にコミュニケーションすること。統合的かつ自立した批判的思考を行うこと。」を身につけて卒業することをアウトカムとして求めている³⁰。

この教育目標を達成するために、次のような コア・プログラム、 オールレベル・プログラム、 ロウアー・ディヴィジョン・プログラム、 2年生以上のプログラムの4つの科目区分を設定している³¹。

コア・プログラムは、将来の勉学やキャリアに備えるための基礎知識やスキルを学生に身に付けさせるために設定されている。初年次の学生はコア・プログラムに登録する。2006年度は次の9科目である。「黒人、カソリック教徒、ユダヤ教徒：アメリカの経験」、「文化と公的領域：メディア、芸術、法律、文学の諸研究」、「シェイクスピアの女性との対話」、「種の理解」、「視覚的生態学」、「生態系力学と保存：木が森で倒れるなら」、「環境問題での紛争」、「太平洋岸北西部における森林生態学と森林マネジメント：遺伝子から地球温暖化まで」、「ジェンダーとメディア」。

いずれの科目も、受講者 69 人に対して教員 3 人、受講者 34 人もしくは 40 人もしくは 46 人に対して教員 2 人で、受講者 23 人に対して教員 1 人となっている。学生 23 人に対して教員 1 人の割合のラーニング・コミュニティとなっており、学生と教員、学生同士の相互作用を確実にする。異なったディシプリンの教員が複数で教え、インターディシプリナリーなアプローチで学生のテーマや課題の探求を助ける。セミナー、個々の会議、講義、グループ学習、研究調査旅行、ラボラトリーでの活動を含む。ただし、学生からは、フィールド・ワーク、海外留学など実習費を別途徴収している。

「文化・テキスト・言語」、「環境研究」、「表現芸術」、「科学研究」、「社会・政治・行動・変化」、「ネイティブ・アメリカンと世界の先住民研究」といった各プログラムからは以下の科目が提供されている³²。各プログラムは伝統的な学科やコースではなく、インターディシプリナリーで 受講者上限人数が示されており、多くても 70 人前後である。

オールレベル・プログラムは、1 から 4 年生が対象で主専攻 (major) としてカウントできる。25%が新入生で、残りは 2 年生以上が履修登録する。インターディシプリナリーな科目である。ロウアー・ディヴィジョン・プログラムは、1 年生と 2 年生のみ対象で、それぞれ 50%ずつの割合で占める。2 年生以上のプログラムは、特別に優秀な初年次生にのみ履修が認められる。

エバーグリーン・ステイト・カレッジのコア・プログラムは、異なる学問分野からの教員によるチーム・ティーチングが徹底されたラーニング・コミュニティで、1 クォーター 1 科目 16 単位となっている。ラーニング・コミュニティが 1 学期間の学生のスケジ

ルールを大きく占める。全てのプログラムの最後に、学生は公的な成績を構成する材料のポートフォリオの一部となる自己評価を作成する³³。

このような教育を行うためには、教員が教育熱心である必要があり、教員は研究よりもティーチング・スキルや実践能力を重視し採用される³⁴。フルタイムとパートタイム合わせて 221 人いる教員のうち博士号保持者は 74.2%となっている。エバグリーン・ステイト・カレッジには 6 人のアカデミック・ディーンがあり、採用兼FD担当のディーンが 1 年に約 35 人の教員を新しく雇用する。採用時においてスキルがあるか否かを問うより、教育に専心するつもりがあるか否かを文書に書かせ、この大学で何をしたいかといった夢を語らせるといふ。教員には、夏に 1 週間の研修、教員向けの手引き、会議・会合、グループ・ワークが用意されている。チーム・ティーチングが行われるラーニング・コミュニティは教員を孤立させず、教育改善にも役立つ。

大学経営側にとってこうした取り組みのインセンティブは、無駄な一般教育の科目ができず、効率的に科目を増やし提供できることである。卒業要件科目の中で一般教育科目の割合が下がり、英語やライティングの科目をラーニング・コミュニティのコア・プログラム科目に含めることにより、リメディアル科目をわざわざ開講する必要もなくなった。また、この大学の各科目には履修登録予定者数が設定されており、研究調査旅行などにかかる実費は学生の負担となっており、収容力（キャパシティ）と学生の需要の関係に考慮したカリキュラム編成となっている。地理的立地条件が悪く州からの財源が縮小している中、教員のチーム・ティーチングによるラーニング・コミュニティの運営で、大衆化・多様化した入学者の教育効果を高めながら学生を維持・確保する効率的な戦略といえる。

（3）ポートランド州立大学（Portland State University）

ポートランド州立大学は、「知識を市に活かそう Let knowledge serve the city」を標語にする都市型の学生数 2 万 2000 人を超える州立大学である³⁵。この大学は、1994 年に一般教育の改革に着手し、新しい一般教育プログラムであるユニバーシティ・スタディーズ・プログラムを採用した。そして、ラーニング・コミュニティを導入し、一般教育プログラムをより少ない単位時間で消化し、しかも学生の学びの成果を増加させることに成功したとされている³⁶。

ユニバーシティ・スタディーズ・プログラムとは、さまざまなデパートメントにわたって学際的に学生を教員や上級生に結びつけていくための一般教育の授業改善であった。このプログラムの究極の目標は、生涯学習を追求するのに必要とされる適切な態度とスキルを身につけた卒業生を輩出することである。ユニバーシティ・スタディーズ・プログ

ラムはリベラル・スタディズとオナーズ・プログラムに登録した学生を除くすべての学生にとって必修である³⁷。学際的な科目群は、すべての学生の満足度を高める学習機会を提供するため〔例2〕のように設計されている³⁸。一般教育は、改革前は63単位必修であったが、45単位必修となった³⁹。

〔例2〕

初年次探求 Freshman Inquiry (FRINQ) 15単位 1年次レベル

1年にわたるメンターの授業時間をとまなう科目。インターディシプリナリーなアプローチを用いて、テーマについて異なった視点から探求する。異なるディシプリンからの教員がチームとして科目を教える。各教員は学部の上級生から選ばれたピア・メンター peer mentor とペアを組む。授業は講義、グループでの話し合いなどを行い、それを補完する形でピア・メンターによる授業が週2回行なわれている。

2年次探求 Sophomore Inquiry (SINQ) 12単位 2年次レベル

1学期にわたるメンターの授業時間をとまなう科目。教員による授業が週2回、大学院生のピア・メンターによる授業が週2回行なわれる。2年次探求 Sophomore Inquiry の科目とアッパー・ディヴィジョンのクラスターは相互に関連し、2年次探求 Sophomore Inquiry 科目の中の1つと直接にリンクするクラスターからアッパー・ディヴィジョン・クラスターは選択されることになる。

アッパー・ディヴィジョン・クラスター Upper Division 12単位 3年次レベル

2年次探求の科目と関連があり、さまざまなディシプリンの科目から成る。

4年次キャップストーン Senior Capstone 6単位 4年次レベル

さまざまな専攻やバックグラウンドを持った学生がチームとしてコミュニティ・プロジェクトに参加し、教員やコミュニティのリーダーとともに課題を理解し解決する課題解決型卒業研究。

ユニバーシティ・スタディズ・プログラムは、自然科学、社会科学、人文科学、プロフェッショナル・スクールの各々のディシプリンが、どのように異なった方法で問題にアプローチするのか、さらに複雑な問題を理解するためにそれらはどのように互いに作用するのか、を学生に理解させるプログラムである。教員たちは、インターディシプリナリーであるべきことをペダゴジー（教授法）の中心と捉えている。ユニバーシティ・スタディズ・プログラムの具体的な到達目標は、批判的思考、コミュニケーション、人間の多様性の認識、倫理と社会的責任の4つである⁴⁰。

教員は学生の学習を分析し、進歩を評価するのに大学独自の達成基準である「グループ

リック rubrics」を適用している。ルーブリックには、目標である「批判的思考」、「ライティング」、「数量的能力」、「人間の経験の多様性」、「倫理的問題と社会的責任」に関してそれぞれの6段階の達成基準が記されている⁴¹。ルーブリックで、クォーターごとに評価の変化を通してみることににより、学生の変容過程を把握することができる。

さらに、ユニバーシティ・スタディズ・プログラムでは、学習のプロセスをみていくことを重要とみなしポートフォリオを導入した。最初はポートフォリオを一般教育プログラムでのみ用いたが、専門教育においても工学や建築学から始まり徐々に普及し、歴史学、文学、政治学にも有効で、大学院生にも利用できることがわかった。学生の知識の習得状況や研究の進捗状況が把握できるため、卒業生を雇用する側もポートフォリオを使うことを歓迎する。ジェネリック・スキル generic skill という観点から学生の学習成果をみると、試験よりもポートフォリオの方が知識を身につけて運用することに対して効果的であった。1991年から紙ベースのポートフォリオをデジタル化してeポートフォリオ (eportfolios) と呼び、ユニバーシティ・スタディズ・プログラムの4つの目標を達成するために、初年次探求、2年次探求、3年次クラスター、4年次キャップストーンの各授業で活用している。学生が自分で目標を記入し、課題を管理したり、教員が学生に助言し、コメントを記入したりできるようになっている。また、学生はeポートフォリオを産業界や官庁および保護者に対して、地域社会の環境や移民の問題など大学で学んだ成果の説明に使うことができる⁴²。

初年次と2年次の学生には、基本的なコンピュータ・テクノロジー、リサーチとライティング・スキル、課題の処理の仕方などを学ぶメンター・セッションが提供されている。

ピア・メンターである学部の上級生や大学院生は、GPA3.0以上であり、コミュニケーション能力、問題解決能力、プログラムの目標への関心度などにより選ばれ、州から才能・成績に基づいた奨学金を受け取る⁴³。すべてのメンターは多様性を理解する教育やライティングの指導、テクノロジーの応用、グループ学習に関する訓練を受ける。

また、教員について見ると、一般教育だけを教える教員を雇い、その人々を中心にして、他の部門の教員に働きかけて、ユニバーシティ・スタディズ・プログラムへの参加を促した。さらに、一般教育のコースを開発する教員に、特別な手当を出した⁴⁴。そうすることにより、全体の約半数の教員が一般教育に関わるようになった。初年次生の取る一般教育科目には35%、4年生が履修するキャップストーンには70%程度の教員が関わっている。教員が一般教育に携わるためのインセンティブは、金銭的報酬以外に、部門を越えたさまざまな教員と協働でカリキュラム開発することの楽しさであり、一般教育を教えると自分の所属の部門、すなわち専攻に学

生を呼び込むことができることである。

ポートランド州立大学は、教員だけではなく州の奨学金を受け取る在学生在が参加するラーニング・コミュニティに、充実した e ポートフォリオを取り入れ、学生の需要を満たすカリキュラム編成とした。

おわりに

州からの財源の縮小と学生の多様化に対応し、地域住民に対するアカウンタビリティ（説明責任）がとりわけ問われる州立大学 3 校の、教育目標の設定、カリキュラムの編成、教職員の関与の仕方、教育の成果の測定等についてラーニング・コミュニティを中心に検討してきた。

ワシントン大学は、プロフェッショナル・スタッフを活用した独立採算制により、既存の一般教育の大規模講義科目にボランティアのピアリーダーによる「ユニバーシティ・コミュニティ」を連結させたラーニング・コミュニティにより初年次教育の質の向上を図ることに成功している。学生数の多い研究大学であるだけに、研究を重視する教員をいかに教育に巻き込み、いかにプログラムを低コストで管理運営し、学生へのサービス向上を図るかが大きな課題であった。一方、比較的規模が小さいエバグリーン・ステイト・カレッジは、伝統的な学科や専攻の名称ではなく、「社会・政治・行動・変化」や「ネイティブ・アメリカンと世界の先住民研究」といった名称で教育プログラムを用意し、複数の教員によるラーニング・コミュニティを実現させている。全学を挙げて教育を最優先し、すべての科目の履修登録者人数を示しカリキュラムを管理運営している。さらに、フィールドワーク等の実費は各学生から徴収していた。ポートランド州立大学は、教員と州からのメリット・ベースのお金を受け取るピア・メンターとの連携によるラーニング・コミュニティを実現させ、ルーブリックという教育目標の達成基準の策定、そして徹底したポートフォリオの充実によって、一般教育のスリム化を果たした。つまり、研究大学であるワシントン大学では州の予算を使わずに学士課程教育に力を入れ、エバグリーン州立大学では非伝統的の学生を教育重視の教員により低コストで大学に適應させ、ポートランド州立大学では学習の目標と成果を徹底的に地域住民へ公開してきた。

本稿ではアメリカの 3 大学を取り上げ、政府やアクレディテーション団体へのアカウンタビリティ（説明責任）を果たし、学生を確保するために、ラーニング・コミュニティを用い、カリキュラム編成を改善し、教育のアウトカムづくりを行なっている事例を検討した。いったん受け入れた学生（インプット）を、一定期間の学習に適應させ、卒業させる（アウトプット）という大学の営みの中で、学生に何をどれだけ身に付けさせ

たかが教育の成果（アウトカム）である。このアウトカムを左右するのは、学生と教員がいかに学習・教育に互いに関与するかである。

何が学士課程教育の目標なのか、4年間の教育を通してどのような学力を身に付けた学生を世に送り出そうとしているのかを不問に付したままで、つまり出口での学力問題を抜きに、入り口での学力問題だけを語ることはできなくなりつつある^{4 5}。教育の質を論じる際に、学生の学力をどうとらえ、どう教育するかは、とりわけ学生からの授業料収入に頼る大学にとって経営に直接的に影響を及ぼす事柄となりうる。アメリカにおけるラーニング・コミュニティを用いた教育改善の試みは、FDが義務化される日本の大学において今後ますます注目されていくことになる。

本研究は、文部科学省科学研究費の基盤研究(B)「大学経営の高度化とそれを支援する政策のあり方」(研究代表者：塚原修一 国立教育政策研究所高等教育研究部長 / 課題番号 18330182)の補助を得て進められた。

1 Williams, Thomas, 2002, Are You Ready for the Next Generation of Students?, Iowa City: Noel-Levitz.

2 Ibid.

3 Zikopoulos, Marianthi, 2001, "Outcomes Assessment and Re-accreditation Data Concerns?: Look to National Surveys for (Some) Help," Institutional Research : Leadership through Excellence. North East Association for Institutional Research 28th Annual Conference Proceedings (Cambridge, Massachusetts, November 17-20, 2001): 207-214.

4 Ibid.

5 Astin, Alexander W., 1991, Assessment for Excellence, New York: American Council on Education/Mamillian Publishing. I-E-OモデルのIはInputs, EはEnvironments, OはOutcomesを意味する。

6 Zikopoulos, op.cit.

7 Astin, Alexander W., 1992, "What Really Matters in General Education: Provocative Findings from a National Study of Student Outcomes," Perspective, 22(1): 23-46.

8 Borden, Victor M.H., Burton, Kathy L., Evenbeck, Scott E., and Williams, Gayle A., 1997, "The Impact

-
- of Academic Support Programs on Student Performance and Persistence," Research Brief, 4(4).
- 9 Laufgraben, Jodi Levine, 2005, " Learning Communities," Upcraft, M. Lee, Gardner, John N., Barefoot, Betsy O. eds., Challenging & Supporting the First-year Student, San Francisco: Jossey-Bass.
- 10 Alissa Gardenhire-Crooks, Herbert Collado, and Ray, Barbara, 2006, A Whole Nother World: Students Navigating Community College, New York: Manpower Demonstration Research Corp.
- 11 Thompson, Carol Lynn, 1998, " Assessing the Learning Community: Good News for Speech Communication," Paper presented at the Annual Meeting of the National Communication Association 84th, New York, November 21-24, 1998.
- 12 Laufgraben, Jodi Levine, 2005,op.cit.
- 13 Ibid.
- 14 Taylor, Kathe, 2003, Learning Community Research and Assessment: What We Know Now, Olympia: National Learning Communities Project 2000-03.
- 15 Swing, Randy L. and Upcraft, M. Lee, 2005, " Choosing and Using Assessment Instruments," Upcraft, M. Lee, Gardner, John N., Barefoot, Betsy O. eds., Challenging & Supporting the First-year Student, San Francisco: Jossey-Bass..
- 16 Kats, Albert M. and Gangnon, Bradley A., 2000, " Portfolio Assessment: Integrating Goals and Objectives with Learner Outcomes," Assessment Update, 12(1): 6-7, 13. 州立のリベラル・アーツカレッジであるウイスコンシン大学スーペリア校では、非伝統的学生の占める割合が高く、1980年代後半から一般教育プログラムにおけるアセスメントを開始した。
- 17 1861年創立。
- 18 やる気のある学生をひきつける30人くらいのプログラム。5～6世代前から大学卒業者である家庭の子弟の同質集団。
- 19 アラスカにおける石油資源と自然の保護の問題など州が環境に対して関心をはらっている。政治学的、経済学的、社会人口学的アプローチをとるプログラム。
- 20 クラスタートとなっているので、学生は部分的に単位を落とすことができない。基本的に履修登録は早い者順であり、コミュニティ・カレッジからの転学生は登録しない。
- 21 FIGのリーダーは、担当のプロフェッショナルや教員と連携して、コミュニティをつくる。また、ピア・リーダーとしての役割は教員でも、カウンセラーでもないで、問題が生じた場合は、問題を整理し、然るべきところを紹介する。
- 22 ワシントン大学2006年秋のFIGに関する説明用紙より。
- 23 新人教員の必修のものもある。10から15人のグループにして、教育に対する評価の高い教員を呼んできてワークショップを行う。また、オプションとしてTeaching large lectures といったプログラムも実施して

いる。

2 4 Guskin, Alan, Marcy, Mary B., and Smith, Barbara Leigh, 2003, Learning Communities and Fiscal Reality: Learning in a Time of Restricted Resources, Olympia: National Learning Communities Project 2000-03.

2 5 1971 年創立。

2 6 Guskin, Marcy, and Smith, op.cit.

2 7 学士課程の学生数は 4171 人, 6 年間の卒業率 (1999 年入学) 56%, 教員数フルタイム 158 人, パートタイム 63 人, クラスの規模は 100 人以下である。College Board's Common Data Set for 2005-06 Undergraduate Information (abridged)より。

2 8 The Evergreen State College 2006-2007 Catalog p.4

2 9 Ibid.

3 0 Ibid.

3 1 Ibid.

3 2 伝統的な学科やコースの名称を用いていない。

3 3 Taylor, op.cit.

3 4 教員の採用にあたっては, 5 つの原則, collaboration, interdisciplinary, combining theory and practice, diversity, personal engagementがある。カリキュラムの見直しは, 毎年夏に 3 日間かけて行われている。

3 5 1946 年創立。フルタイムとパートタイムの教員, アドミニストレーターを含むスタッフは 2004 年秋の時点で 1942 人。

3 6 Taylor, op.cit.

3 7 リベラル・スタディズ・プログラムとはリベラル・スタディズ (一般教養) を専門とする文学士 (B.A.) もしくは理学士 (B.S.) を授与するプログラムで, ライティングの科目と, 文学芸術・自然科学・社会科学の 3 つの領域から単位を取得する。

3 8 ポートランド州立大学 University Studies パンフレット

3 9 White, Charles R., 1994, "A Model for Comprehensive Reform in General Education: Portland State University," The Journal of General Education, 43(3): 168-237.

4 0 Taylor, op.cit.

4 1 学士課程教育において目指される基本的には社会が求めているジェネリックgenericスキルの達成基準である。各デパートメントの達成目標は別にあり, それぞれ異なる内容をgenericなものに付加している。

4 2 ポートランド州立大学の Institutional Research and Planningのオフィスが大学の組織全体のアセスメントとしてもポートフォリオを活用し, ホームページで公開している。2001 年から始まったナショナルプロ

ジェクトの一環としてポートフォリオを開発した。Institutional Research and Planningのオフィスは、財政や学生担当、他の調査部門といった各部署と横の連携を保っている。

4 3 Reynolds, Candyce, 2003, "Undergraduate Students as Collaborators in Building Student Learning Communities," To Improve the Academy: Resources for Faculty, Instructional, and Organizational Development, 21: 225-237.

4 4 夏にカリキュラム開発をすると報酬が出る。

4 5 天野郁夫, 2006, 『大学改革の社会学』玉川大学出版部。

Improvement in Education by the Employment of a Learning Community

Atsuko Takano (Yokohama City University)

The purpose of this article is to examine the benefits of a Learning Community. Driven by increased pressure for accountability to government and accrediting agencies, outcome assessment has recently been implemented in the American higher education system and the Learning Community was shown to result in great outputs. I examine the curricular and registration strategies, and educational methods in use by the University of Washington, Evergreen State College, and Portland State University. These three cases studies reveal that this system may be applicable to the Japanese University system.